



UAE、エンタメ分野に集まる期待



ジェットロ・ドバイ事務所 ディレクター 清水 美香

産業多角化に挑む産油国 UAE

UAE（アラブ首長国連邦）は首都アブダビやドバイなど7つの首長国で構成されている連邦制の国で、人口約1,000万人のうち自国民は1割程度、残り9割近くが外国人で占められている。かつては漁業と真珠採取が中心だったこの地では、石油が発見されてから産油国として知られるようになった。しかし現在は政府が石油依存からの脱却を目指し、産業多角化に取り組む。2024年のGDPに占める石油部門の割合は2割程度で、残りは非石油部門だ。AI、宇宙、ライフサイエンス、エンターテインメント、コンテンツ分野など、政府が力を入れる産業は多岐にわたる。

観光文化都市として注目

中東のハブ空港として知られるドバイ国際空港を有し、ドバイモールやブルジュカリファに代表される大型観光・消費施設が多数存在するドバイは、観光都市としても知られる。2024年のドバイへの来訪者数は1,872万人、ドバイ国際空港の利用者数は9,230万人を記録した。UAEは年間を通じて気温と湿度が高く日差しも強いことから、モール、屋内スキー場やスケート場、水族館など、屋内型施設が人気だ。屋外型レジャーは、プールやウォーターパークが充実しているほか、スポーツは、サッカー、パデル、クリケット



ドバイのランドマーク「ブルジュカリファ」（ジェットロ撮影）

などが盛んで、最近では中東初のプロ野球リーグも発足した。さらにアクセス面の優位性を生かして大型の展示会も多数開催され、世界中から人が集まる。

また、首都アブダビは文化都市としての顔も持つ。グランドモスクをはじめとした自国文化の象徴的な施設に加え、フェラーリ博物館、ルーブル・アブダビなどがあるほか、2025年には日本のチームラボによるアートプロジェクト「teamLab Phenomena Abu Dhabi」（チームラボ・フェノメナ・アブダビ）がオープンした。世界最大級の屋内型テーマパークである、ワーナー・ブラザーズ・ワールド・アブダビもある。2025年5月には米国のウォルト・ディズニーがアブダビに新テーマパークを開設すると発表した。



アブダビの「グランドモスク」（ジェットロ撮影）

高まる日本のコンテンツ人気

中東における日本のコンテンツ人気は年々高まっている。UAE 経済省の発表（2022年）によると、中東地域のメディア&エンターテインメント産業は2026年には約470億ドルに達することが予想されており、この間の年平均成長率は7.4%と見込まれている。中でもUAEは同地域の成長を牽引する存在であり、UAEのエンターテインメント産業は2021年から2028年にかけて年平均成長率9%の伸びが予測されている。当地の地上波やアニメ動画配信プラットフォームを通じた日本アニメ視聴者も多い。これまでに複数の日本アニメの映画が上映されているが、直近では『劇場版「鬼滅の刃」無限城編』が2025年9月に上映された。その際には、ドバイ中心部の幹線道路に複数の映画の看板が掲げられ、注目度の高さが伺えた。10月からは劇場版「チェンソーマン」の上映にあわせて同様の宣伝がされており、人気を博している。映画は英語とアラビア語の字幕付きで上映される。筆者も小学生の子供と「鬼滅の刃」や「名探偵コナン」などを見に劇場へ足を運んだが、老若男女多国籍の観客が日本の映画を嬉々として鑑賞している様子を見るのは感慨深く、誇らしい気持ちになった。また、スタジオジブリの体験型展示「The World of Studio Ghibli」が2026年にアブダビで開催されるなど、今後ますます日本のコンテンツ人気は加熱していきそうだ。



「鬼滅の刃」が上映された際の様子（ジェットロ撮影）